

2022年の『ユリシーズ』－スティーヴンズの読書会

第13回 ナウシカア（第13挿話）

2021年8月22（日）@オンライン

13:30~13:40 ご挨拶

13:40~15:00 第1部 主催者発表

第13挿話の地図・登場人物紹介／ガーティの人物像（平繁）

『ユリシーズ』をめぐる検閲と裁判（小林）

ガーティとブルームの「終わらない文」（南谷）

15:00~15:10 休憩

15:10~16:05 第2部 ブレイクアウトルーム＋ディスカッション

16:05~16:20 休憩

16:20~17:30 第3部 フロアディスカッション＋テーマパネル作成

17:40~19:30 懇親会

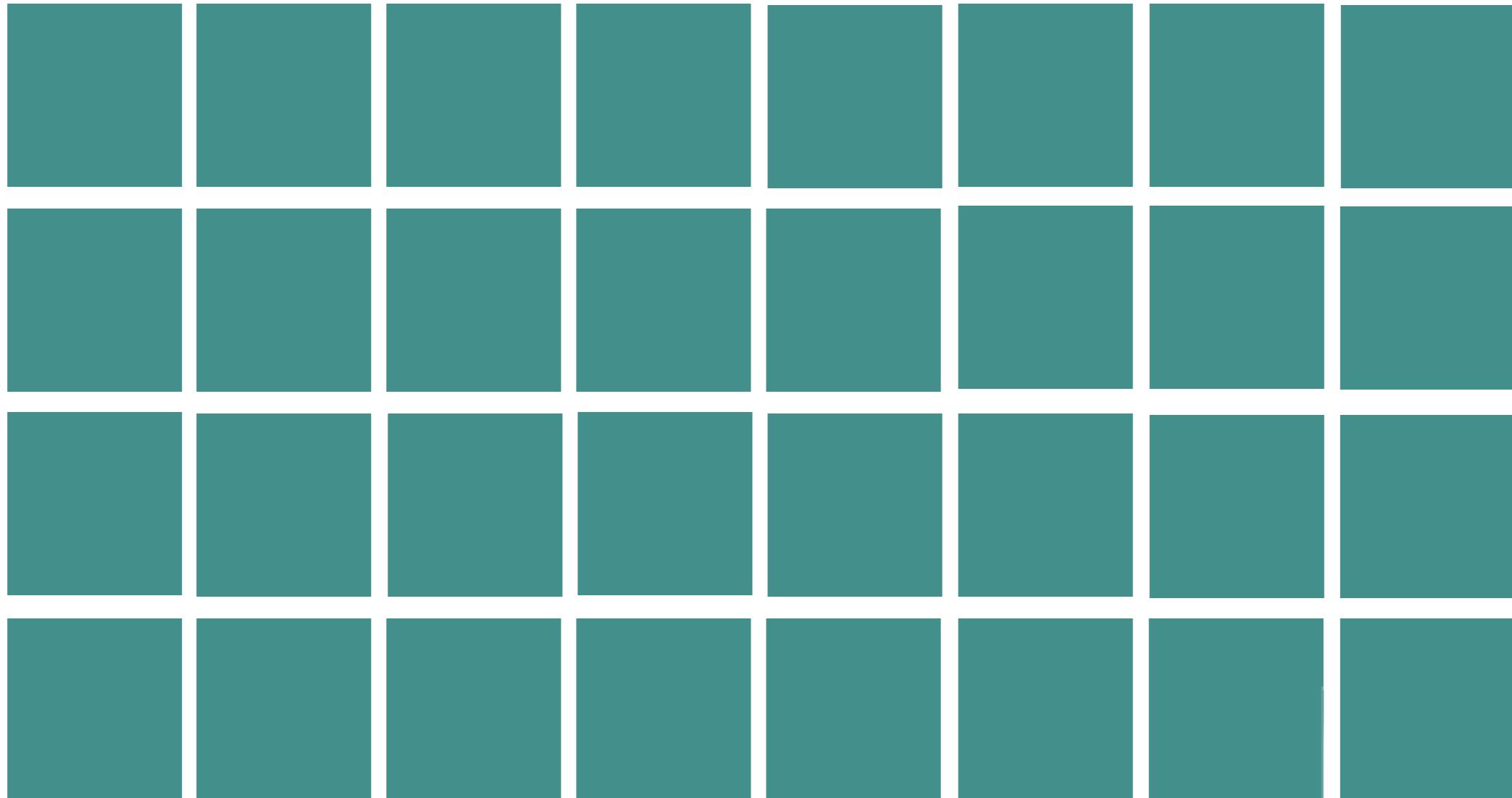
※スライド中では丸谷才一他『ユリシーズ』（集英社）を引用するにあたっては、
「U-△ 挿話番号.ページ数」と表記します。

2022年の『ユリシーズ』－スティーヴンズの読書会 スケジュール

| | | | |
|------------------|-------------------|--------------------|---------------|
| 第1回 2019年6月16日 | 第4挿話 カリュプソー | Book II. Odyssey | initial style |
| 第2回 2019年8月25日 | 第1挿話 テレマコス | Book I. Telemachia | initial style |
| 第3回 2019年10月20日 | 第2挿話 ネストール | Book I. Telemachia | initial style |
| 第4回 2019年12月22日 | 第3挿話 プロテウス | Book I. Telemachia | initial style |
| 第5回 2020年2月9日 | 第5挿話 食蓮人たち | Book II. Odyssey | initial style |
| 特別回 2020年4月26日 | 特別回 第1挿話～第5挿話 | Book II. Odyssey | initial style |
| 第6回 2020年6月28日 | 第6挿話 ハデス | Book II. Odyssey | initial style |
| 第7回 2020年8月23日 | 第7挿話 アイオロス | Book II. Odyssey | initial style |
| 第8回 2020年10月25日 | 第8挿話 ライストリュゴネス族 | Book II. Odyssey | initial style |
| 第9回 2020年12月6日 | 第9挿話 スキュレとカリュブディス | Book II. Odyssey | initial style |
| 第10回 2021年2月21日 | 第10挿話 さまよう岩々 | Book II. Odyssey | initial style |
| 第11回 2021年4月25日 | 第11挿話 セイレーン | Book II. Odyssey | |
| 第12回 2021年6月27日 | 第12挿話 キュクロプス | Book II. Odyssey | |
| 第13回 2021年8月22日 | 第13挿話 ナウシカア | Book II. Odyssey | |
| 第14回 2021年10月24日 | 第14挿話 太陽神の牛 | Book II. Odyssey | |
| 第15回 2021年12月26日 | 第15挿話 キルケ | Book III. Nostos | |
| 第16回 2022年2月 | 第16挿話 エウマイオス | Book III. Nostos | |
| 第17回 2022年4月 | 第17挿話 イタケ | Book III. Nostos | |
| 第18回 2022年6月16日 | 第18挿話 ペネロペイア | Book III. Nostos | |

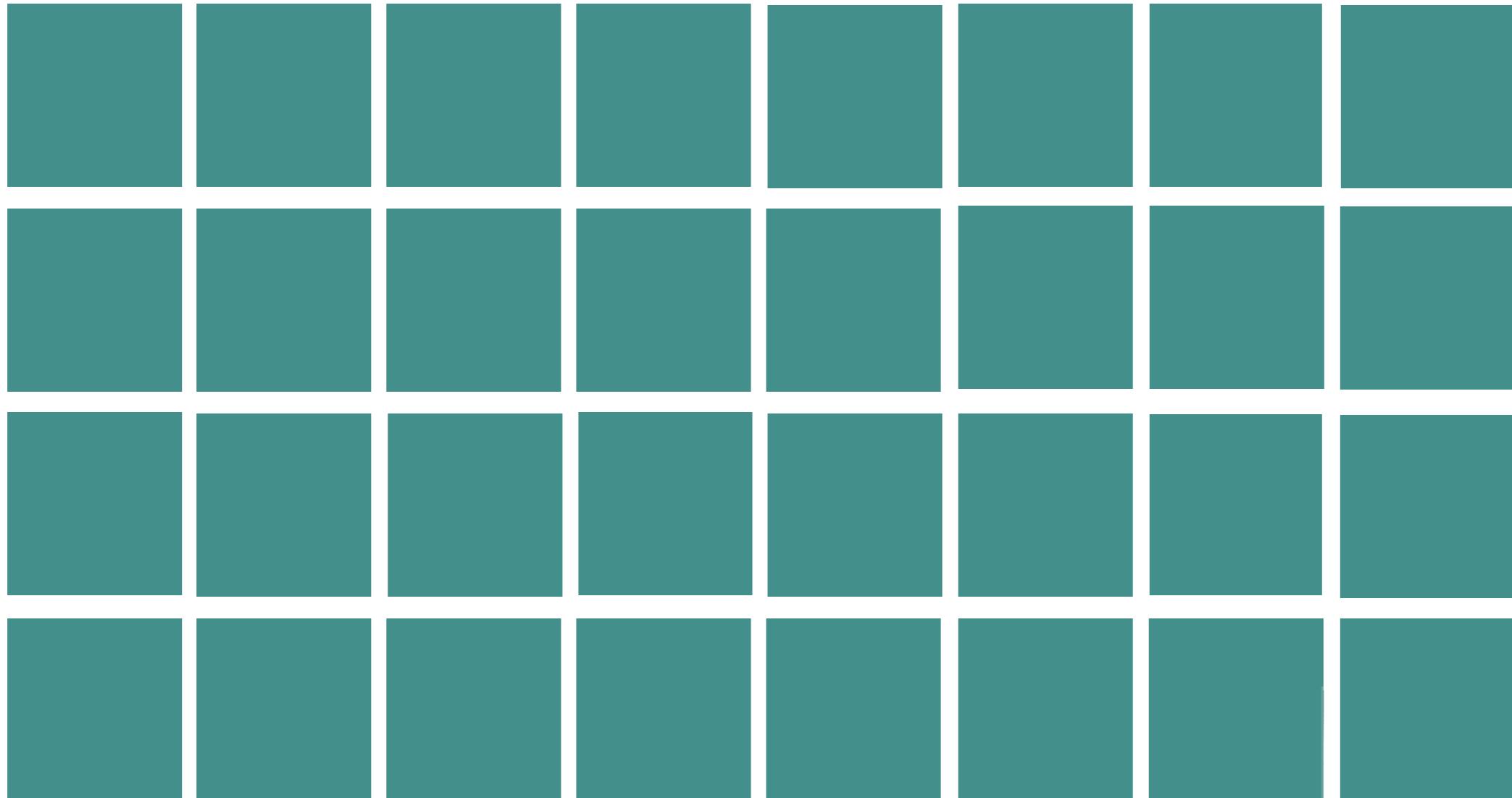


Episode 1: Telemachus



“ふんぞり返って、ふくらかなバック・マリガンが階段のてっぺんへ現れた。捧げ持つ石鹼の泡立つ丸い器にのせて、手鏡とカミソリが十文字に...”
(U-Y 1. 11)

Episode 2: Nestor



“—さあ、コクラン、なんという市が遣いを送った？” “—タレントウムです。”
“よろしい。それで？” “—戦争になりました。” “よろしい。どこで？” (U-Y 2. 49)

Episode 3: Proteus

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 海 | 波 | 砂 | 貝 | 風 | 浜 | 潮 | 浜 |
| 馬 | 犬 | 女 | 男 | 馬 | 鷗 | 鳩 | 神 |
| 目 | 耳 | 靴 | 足 | 口 | 齒 | 臍 | 湊 |
| 死 | 産 | 詩 | 韻 | 巴 | 触 | 汚 | 溺 |

“可視態の不可避の様式。少なくともそれ、それ以上ではないにしても、おれの目を通しての思考。万物の署名をおれはここで読み取る” (U-Y 3. 73)

Episode 4: Calypso

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 猫 | 肉 | 食 | 臓 | 糞 | 便 | 紙 | 読 |
| 牛 | 乳 | 血 | 環 | 尻 | 肥 | 秘 | 隠 |
| 朝 | 鐘 | 金 | 猶 | 緩 | 庭 | 夫 | 妻 |
| 陽 | 絵 | 会 | 魂 | 出 | 鍵 | 失 | 閨 |

“リアポウルド・ブルーム氏は禽獸の臓物をうまがる男である。どろっとしたもつがらスープもいいし、こりこりする砂肝、詰め物をして焼いた心臓....” (U-Y 1. 11)

Episode 5: Lotus Eaters

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 郵 | 喪 | 花 | 茶 | 東 | 屍 | 温 | 浮 |
| 醉 | 香 | 水 | 植 | 歩 | 帽 | 光 | 沈 |
| 紙 | 聖 | 性 | 馬 | 猫 | 藥 | 歌 | 浴 |
| 式 | 棒 | 車 | 喫 | 煙 | 石 | 賭 | 体 |

“荷台車の連なるサー・ジョン・ロジャースン船寄せ通りをブルーム氏は肅々と歩いた。ウィンドウミル小路を過ぎ、リークス亞麻仁加工所、郵便電報局を過ぎる...” (U-Y 5. 127)

Episode 6: Hades

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 肉 | 血 | 骨 | 土 | 体 | 臟 | 心 | 爪 |
| 牛 | 馬 | 蹄 | 犬 | 鼠 | 蛆 | 花 | 草 |
| 屠 | 回 | 搖 | 埋 | 腐 | 解 | 交 | 流 |
| 列 | 噂 | 車 | 父 | 食 | 黒 | 帽 | 雨 |

“マーティン・カニンガムが、まず先に、シルクハットの頭をギューと軋む馬車の中へ差し入れ、するりと乗り込んで席におさまった...” (U-Y 6. 155)

Episode 7: Aeolus

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 風 | 機 | 音 | 輪 | 山 | 詩 | 煙 | 教 |
| 電 | 話 | 止 | 転 | 塔 | 種 | 弁 | 学 |
| 肺 | 騒 | 馬 | 車 | 回 | 鍵 | 逆 | 空 |
| 心 | 血 | 鉄 | 樽 | 像 | 交 | 字 | ? |

“ネルソン記念柱の前で路面電車は徐行し、待避線に入り、トロリーポールの移動をすませ、そして発車する。ブラックロック、キングズタウン、ドーキー行き...” (U-Y 7. 203)

Episode 8: Lestrygonians

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 食 | 吐 | 歯 | 臭 | 鼻 | 業 | 環 | 水 |
| 視 | 盲 | 口 | 痛 | 血 | 蠅 | 輪 | 流 |
| 飢 | 鷗 | 疫 | 牛 | 肉 | 交 | 唇 | 穴 |
| 触 | 臓 | 汚 | 屠 | 骨 | 想 | 時 | 門 |

“パイナップル氷砂糖、レモン棒飴、バター飴玉。粗目糖顔の娘がクリスチャン・ブラザーズの男にせっせとクリームボンボンを掏っている。小学校のお楽しみ会だろか。ぽんぽんによくないよ。...” (U-Y 8. 261)

Episode 9: Scylla and Charybdis

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 門 | 談 | 光 | 魂 | 震 | 鷹 | 墜 | 巴 |
| 間 | 論 | 神 | 知 | 靈 | 鳩 | S | 己 |
| 聞 | 語 | 幕 | 戯 | 劇 | 父 | 子 | 牛 |
| 問 | 説 | 床 | 翁 | 狂 | 讐 | 志 | 遺 |

“慇懃に、場を和めるべく、篤震の図書館長が喉ふるわせた。

—それにウィルヘルム・マイスターのあの貴重な一節もあるわけだから。偉大な詩人が偉大な同胞詩人を論じている。逡巡する魂が、葛藤する疑念に引裂かれつつ、苦難の海に立ち向かう。” (U-Y 9. 315)

Episode 10: Wandering Rocks

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 督 | 行 | 合 | 輪 | 馬 | 錢 | 刻 | 父 |
| 列 | 多 | 対 | 回 | 鳥 | 弧 | 落 | 交 |
| 門 | 路 | 像 | 橋 | 潟 | 窓 | 泥 | 海 |
| 扉 | 面 | 鏡 | 鍋 | 煮 | 乞 | 貧 | 貝 |

修道院長イエズス会士ジョン・コンミー師は、てかてかの懐中時計を内ポケットに戻しながら、司祭館の階段を下りた。三時五分前。アーテインまで歩いていくにはちょうどいい。ええ、あのこの名前は何といった？ ディグナム。そう。真にふさわしく義しきかな。

(U-Y 10. 373)

Episode 11: Siren

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 歌 | 音 | 色 | 金 | 銅 | 馬 | 人 | 食 |
| 杖 | 叉 | 鍵 | 聾 | 禿 | 鱈 | 魚 | 酒 |
| 調 | 鳴 | 唱 | 奏 | 笑 | 搖 | 聽 | 煙 |
| 海 | 潮 | 波 | 漣 | 貝 | 鈴 | 耳 | 屁 |

青銅と金の連が蹄を聞いた、鋼鳴りを。

こなまこしゃくしゃくしゃくしゃ

ふあらら、ごつい親指爪からつまんで剥がしてふあらら、ふあらら。 (U-Y 11. 433)

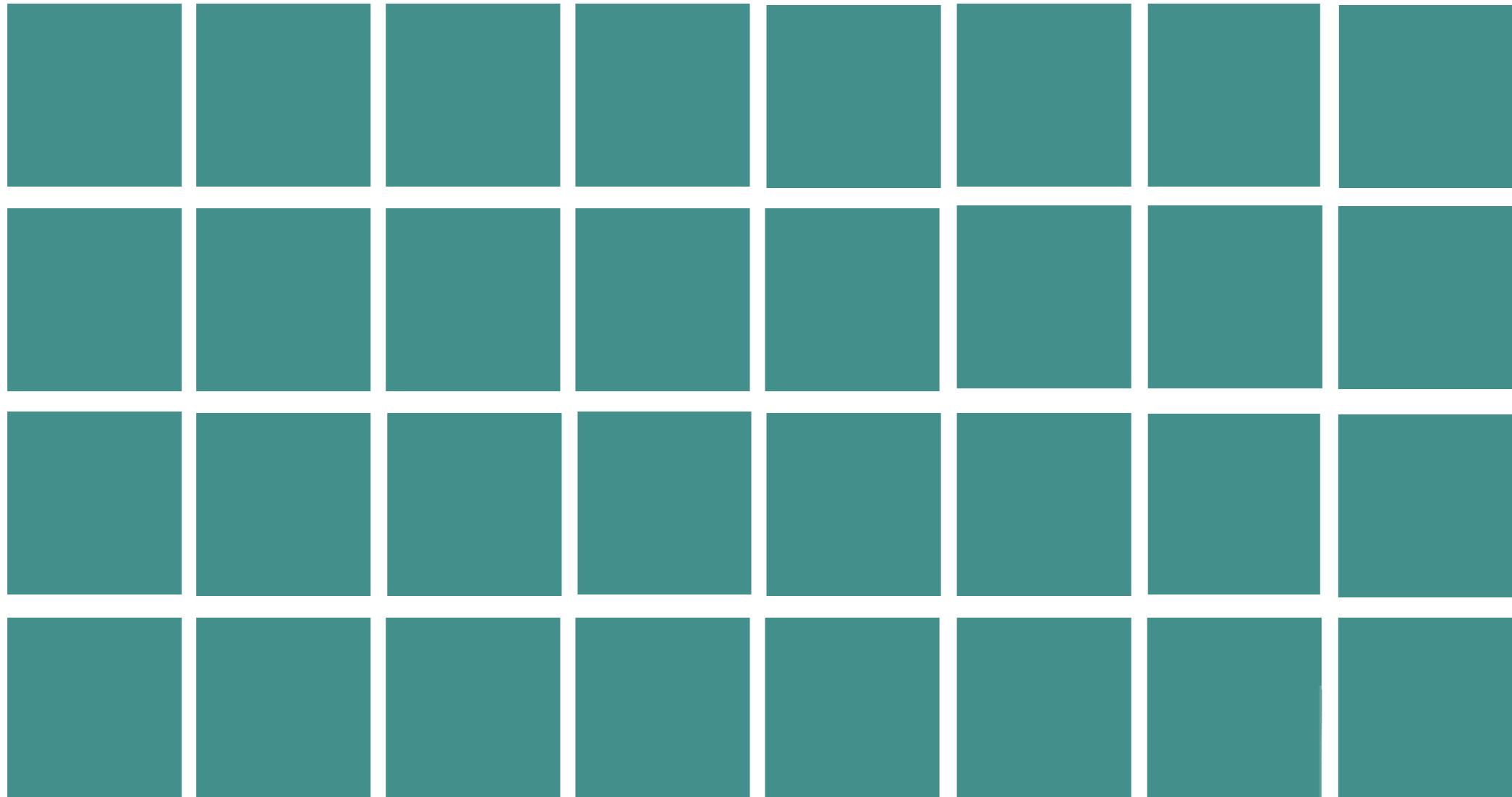
Episode 12: Cyclops

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| I | 目 | 棹 | 酒 | 我 | 俺 | 通 | 発 |
| 一 | 眼 | 棒 | 憎 | 戦 | 畜 | 獸 | 犬 |
| + | 愛 | 火 | 猶 | 死 | 生 | 追 | 伝 |
| 磔 | 罰 | 列 | 人 | 名 | 靈 | 群 | 云 |

ダブリン市警のトロイ爺公とアーバー坂の角んどこでちょいと立話をしていたら畜生ッ煙突掃除め通りすがりに危うく俺の目ん玉へ道具を突っ込みそうにしやがった。

(U-Y 12. 497)

Episode 13: Nausicaa



夏の夕暮れはその神秘な腕に世界を抱擁しはじめました。遙か西のかたに太陽は傾き、つかの間にうつろいゆく一日の名ごりの夕映えが立ち去りかねて、いとおしげに残照を投げかけています。 (U-Δ 13. 497)

主催者発表—ガーティとブルームの「終わらない文」（南谷）



Giuseppe Milo, "Sandymount - Dublin, Ireland - Black and white Street photography," 2017
<https://flic.kr/p/CHmoGh>

第13挿話の謎と諸問題

- これまでの挿話との関連は？
- なぜジョイスは問題になるとわかっていた、猥褻な問題を書き入れたのか？
- 何が隠されているか？何が言い換えられているか？
- 第13挿話はどのような語りになっているのか？
- Mutoscopeとは？「窃視」の文化と「商品化」される女性。
- ディグナム坊やはなぜ夕刊を買うのか。
- ガーティは何歳なのか？
- レジー・ワイリーは何歳なのか？
- 浜辺の謎の男は誰か？
- ブルームは砂浜に何を書こうとした？
- ブルームはいつディグナム家を訪れたのか？
- なぜジョイスは問題になるとわかっていた、猥褻な問題を書き入れたのか？
- “grandpapa Giltrap's lovely dog Garryowen”
- ガーティのお父さんは酒飲みの「市民」？
- U131291の"Cuckoo."と、U13.1306の"Cuckoo."におけるピリオドの意味は？



第13挿話の構成と語り

- 第13挿話の構成

前半部 (Gerty part): U13.1-770 3人称による語り + 自由間接話法

後半部 (Bloom part: U 13.771-1285 1人称による内的独白

最終部 (B+G part): U13.1286-88 +U13.1292-1203

- (1) 前半部は、女性のファッション雑誌や感傷的な文体を用いる小説のパロディ文体を採用。それらの雑誌の常連読者であったガーティのロマンティックな意識を反映した語りなのか？
- (2) ガーティのlamenessが判明した時点で、ロマンティックな幻想が終わり、幻滅したブルームの語りへと切り替わることから、前半は観察者ブルームが勝手に空想したり、理想化された女性像を投影した語り？
- (3) 前半部のtumescent (pompous)でascending な文体と、後半部のshrinkingでdescendingな文体の対比？
- (4) 前半部にみえる接続詞and, though, becauseの多用の意味は？
- (5) 句読点もなく流れるような長い文と、断片的で息の短い文の対比？
- (6) U131291の”Cuckoo.”と、U13.1306の”Cuckoo.”におけるピリオドの意味は？
- (7) 前・後半部は、語彙だけでなく焦点人物に固有のシンタックスが反映されている？

第13挿話の構成と語り

- 第13挿話の構成

前半部 (Gerty part): U13.1-770 3人称による語り + 自由間接話法

後半部 (Bloom part: U 13.771-1285 1人称による内的独白

最終部 (B+G part): U13.1286-88 +U13.1292-1203

| POS | U13_GP(U13.1-770, 1292-1303) | U13_BP(U13.771-1298) |
|---------------|------------------------------|----------------------|
| NP Cutoff:10 | | |
| she | 225(266) | 54(69) |
| it | 116(133) | 81(89) |
| he | 109(123) | 31 |
| I | 12 | 102 |
| her | 81 | 29 |
| they | 50(54) | 53(62) |
| you | 21 | 77 |
| him | 74 | 19 |
| them | 28 | 39 |
| She | 41 | 15 |
| me | 2 | 43 |
| It | 17 | 9 |
| He | 14 | 7 |
| us | 5 | 10 |
| we | 1 | 13 |
| They | 4 | 9 |
| herself | 11 | 1 |
| CCC Cutoff:30 | | |
| and | 452(483) | 100(132) |
| And | 31 | 32 |
| but | 30(49) | 19(31) |
| or | 30 | 19 |
| But | 19 | 12 |

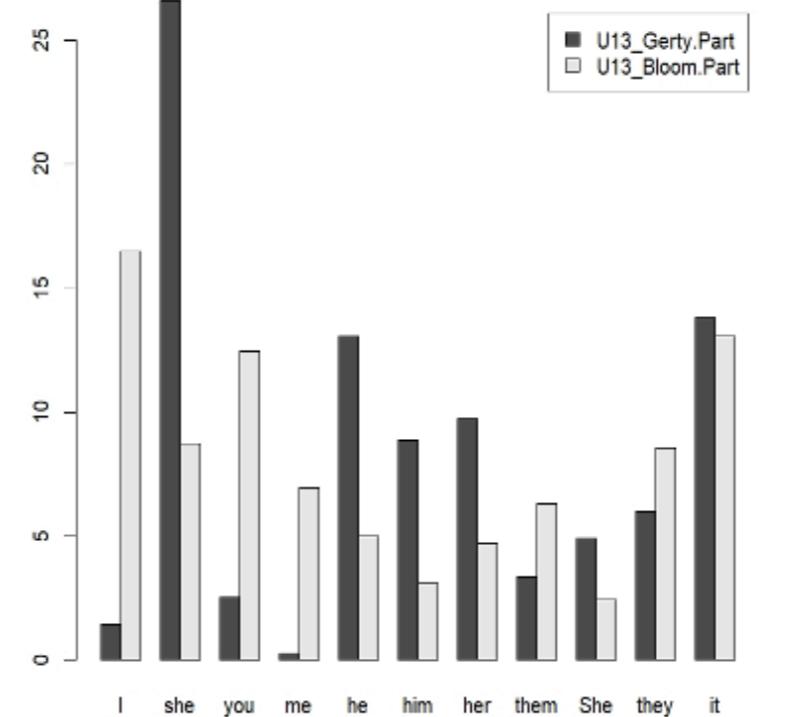


図1 MTmineRによる統計分析。第13挿話をBloom PartとGert Partyに分割した上で、それぞれにおけるNP(pronoun)とCCC (Coordinating conjunction) の頻度データを解析した。変数にはOthersを含めていない。テキストデータには、Project GutenbergからダウンロードしたUTF-8形式のファイルを使用した。

ガリヴァーの原理と客観主義描写

…目を覚ましたときに、ちょうど明るい昼の光が見えたからだ。私は起き上がるこうとした。だが、体を動かすことはできなかった。私はそのとき仰向けになっていたのだが、いつのまにか手も脚もその左右ともが大地にきつく縛りつけられていたからだ。そして長くて太いかつらの髪も同じように地面に括りつけられていた。（ジョナサン・ス威フト『ガリヴァー旅行記』）

... for when I awaked, it was just day-light. I attempted to rise, but was not able to stir: for, as I happened to lie on my back, I found my arms and legs were strongly fastened on each side to the ground; and my hair, which was long and thick, tied down in the same manner.

- 読者はある観察者が経験したであろう物事のみを伝えられ、そしてその人物が経験したであろう順番でそれらを告知される。
- 外的世界はある人が知覚したことの一連の報告として考えられ、不可逆な時間において起こる連続である。
- 一つの経験からまた別の経験へと、蟻のような歩みで動きまわる叙述の方法。
- 客観主義描写において、順に報告される事柄は、[物語をそばで聞いていると想定される]幽霊（読者）の経験に忠実になる。
- 隔絶した語り手の発明と語り手の物語に関する知識の制約

ガリヴァーの原理と客観主義描写

- それゆえ毎朝チャールズおじさんは屋外便所へと赴くのだが、その前にはかならず頭の後ろの髪に丁寧に油をつけてそれを丁寧にブラシでなでつけて、それからシルクハットにもブラシをかけてそれをかぶるのだった。
- Every morning, therefore, uncle Charles repaired to his outhouse but not before he had creased and brushed scrupulously his back hair and brushed and put on his tall hat.
(P2. 12.14; 強調は南谷)
- ウィンダム・ルイス（1882-1957）は、『若き日の芸術家の肖像』における上記の部分を捉えて、「最も卑しい階層の小説作品や新聞記事において、「人がある場所に赴く」などと書かれるのである」（"An Analysis of the Mind of James Joyce," Time and Western Man, 1927, p.126）とし、ジョイスの筆致に階級的に背伸びした文体を見ている。
- ヒュー・ケナーがW.ルイスを批判して、語りの語彙は必ずしも語り手の語彙ではないことを論じる「チャールズおじさんの原理」を創出。

ガリヴァーの原理と客観主義描写

- それゆえ毎朝チャールズおじさんは屋外便所へと赴くのだが、その前にはかならず頭の後ろの髪に丁寧に油をつけてそれを丁寧にブラシでなでつけて、それからシルクハットにもブラシをかけてそれをかぶるのだった。
- Every morning, therefore, uncle Charles repaired to his outhouse but not before he had creased and brushed scrupulously his back hair and brushed and put on his tall hat.
(P2. 12.14; 強調は南谷)
- [ヒュー・ケナーの「チャールズおじさんの原理」]
- 語りの語彙は、語り手の語彙である必要はない。
- 語られている登場人物が実際に話した語（句）、あるいはその人物が語り手であれば言いそうな、その人物の諸特性を反映した語句や言い回し、ときにシンタックスが語り手の文に紛れ込む。
- repaired toやscrupulouslyには「透明な引用符」がついていると想定してもいい。
- 焦点化されている人物がある種の重力場となって、均衡を保っていた中立的な語りをみずからに引き寄せる。
- 隔絶した語り手による、一定した距離はジョイスの小説の場合、確保されない。

チャールズおじさんの原理；ガーティのシンタックス

- 「チャールズおじさんの原理」は語彙から文構造にも拡張して応用できるのかもしれない。文構造は[文を形成する要素間の]関連について一連の判断を配置するものだが、すると今度は、その判断具合が、そのような判断をする人々がどんな人物であるのかを定めるにあたって役立つことになる。
- 白蝶のように透きとおった彼女の顔は象牙のように純粋で、ほとんど靈的な気品を思わせるのに対して、薔薇のつぼみの口もとはまさにキューピッドの弓、古典ギリシャの均整美をしのばせます。こまやかな血管の浮き出ている手はさながら雪花石膏、指はほっそりと伸びて、その白さはたしかにレモンジュースとクリームの女王のたまものですが、彼女がいつもキッドの手袋をはめて寝るとか牛乳の足湯をつかうとかいうのは事実ではありません。 (U-Δ 13.410)
- The waxen pallor of her face was almost spiritual in its ivorylike purity though her rosebud mouth was a genuine Cupid's bow, Greekly perfect. Her hands were of finely veined alabaster with tapering fingers and as white as lemonjuice and queen of ointments could make them though it was not true that she used to wear kid gloves in bed or take a milk footbath either. (U 13. 87-92)

ガーティのシンタックス：because- because Gerty MacDowell was...

彼女はいまとってもきれいな縁取りのついたしゃれた下着を四着、それに衣装三着と何着かの寝間着を持っていますし、下着の裾にまわすリボン飾りは一着ごとに色を変えて薔薇いろ、薄青いろ、フジいろ、黄緑いろにしています。彼女は自分でちゃんと着物の虫ぼしをしたり、洗濯屋から返って来ると、青味をかけたりアイロンをあてたりしますし、アイロンを載せておくための煉瓦まで持っています。とかく洗濯物女たちの手にかかると焼け焦げだらけになるから信用できないのです。今日ブルーの下着をはいたのは万一の幸運を願ったからで、ブルーは彼女自身の色でしかも幸福の色ですから、花嫁は必ず何かブルーのものを身につけるし先週のあの日グリーンの下着をはいたら悲しいことに給費生の資格を取る中間試験の勉強のためにお父さんが彼を家に閉じこめてしまってそれでも今朝着替えをするとき裏返しになっていた下着をそのままはきかけたから出て来るかもれないというのは金曜でない限り裏返しにはくといいことがあって恋人にも会えるし紐がとけるのは彼があたしのことを思ってる証拠ですって。 (U-Δ 13.415-16)

She had four dinky sets with awfully pretty stitchery, three garments and nighties extra, and each set slotted with different coloured ribbons, rosepink, pale blue, mauve and peagreen, and she aired them herself and blued them when they came home from the wash and ironed them and she had a brickbat to keep the iron on because she wouldn't trust those washerwomen as far as she'd see them scorching the things. She was wearing the blue for luck, hoping against hope, her own colour and lucky too for a bride to have a bit of blue somewhere on her because the green she wore that day week brought grief because his father brought him in to study for the intermediate exhibition and because she thought perhaps he might be out because when she was dressing that morning she nearly slipped up the old pair on her inside out and that was for luck and lovers' meeting if you put those things on inside out or if they got untied that he was thinking about you so long as it wasn't of a Friday. (U 13.173-88)

ガーティのシンタックス：because- because Gerty MacDowell was...

- ゆっくりと、振り返りもせずに彼女は凸凹だらけの浜辺をシシーのほうへ、イーディのほうへ、ジャッキーとトミー・キャフリーのほうへ、ボードマン赤ちゃんのほうへと歩いて行きました。すでに夕闇は深まり浜辺には石や木片がころがっているうえに滑りやすい海藻があります。彼女がいかにも彼女らしい一種の静かな犯しがたい感じをみなぎらせて、しかし用心ぶかく非常にゆっくりと歩いていたというのは、何しろガーティ・マクダウエルは…… (U-Δ 13.451-52)
- Slowly, without looking back she went down the uneven strand to Cissy, to Edy, to Jacky and Tommy Caffrey, to little baby Boardman. It was darker now and there were stones and bits of wood on the strand and slippy seaweed. She walked with a certain quiet dignity characteristic of her but with care and very slowly because- because Gerty MacDowell was....
(U 13.766-70)
- ガーティーの文はピリオドで完結することなく継続している。ガーティの文はいつ終わるのか？
- ガーティーのbecauseはロマンスを展開していくために必要な、新しい話題を展開する続詞であり、ある行為や事象の背後には常に別の理由が隠れている、という意識によって駆動されている。
- 上記の引用は、石や木片、海藻が歩行にとって脅威であることを知っている意識によって叙述されている。because-becauseはある種のクライマックスとしての隠されていた秘密の開示を待つているため、ブルームの意識が反映されているはずはない。

ブルームのシンタックス：

- Tired I feel now. Will I get up? O wait. Drained all the manhood out of me, little wretch. She kissed me. Never again. My youth. Only once it comes. Or hers. Take the train there tomorrow. No. Returning not the same. Like kids your second visit to a house. The new I want. (U13.1101-05)
- 疲れた。起きようか？まあ待て。おれの精力をすっかりすいあげやがって、小娘め。彼女はおれにキスした。二度とない。おれの青春。一度以下来ない。彼女の青春も。あした記者で行ってみるか。いや。どうせ昔の面影はない。二度目に訪問した家の子供たちのようなもので。おれは新しさが欲しい。 (U-Δ 13.473)
- “Womanly woman”がブルームから“manhood”を奪う。
- ガーティ部分とは対照的に、息の短い文の連続。
- ブルームはその性的興奮をホウスの丘でのモリーとの経験から一部借りている。ガーティを若い頃のモリに重ねている？
- ガーティとブルームにおけるライフステージにおける「若さ」の問題と、「青春」というものの考え方。

ブルームのシンタックス：I. AM. A.

- O sweety all your little girlwhite up I saw dirty bracegirdle made me do love sticky we two naughty Grace darling she him half past the bed met him pike hoses frillies for Raoul de perfume your wife black hair heave under embon *senorita* young eyes Mulvey plump hubs me breadvan Winkle red slippers she rusty sleep wander years of dreams return tail end Agendath swoony lovey showed me her next year in drawers return next in her next her next.
- おお愛らしいひとよあなたの小さな乙女の白の奥の汚れたコルセットの紐を見てぼくは愛をしてしまってじとじとになってぼくたち二人おいたさんグレイス・ダーリング彼女は彼をなから過ぎベッドで彼に会つてとがった管でフリルつき下着はラウールのために香水あなたの奥さんは黒髪の下で隆起した豊満な「お嬢さん」の若い目はマルヴィをむっちりした乳房がおれをパン馬車ワインクルみたいに赤いスリッパが彼女は錆びた眠りにさまよう夢の年月に帰る尻からアゲンダット気の遠くなる愛らしい彼女がぼくに見せてくれた次の年はズロースをはいてもういちど来る次は彼女のなかで次は彼女の次は。

海辺で商品化される女性—”Those Little Seaside Girls”との関連から

“Those Little Seaside Girls”

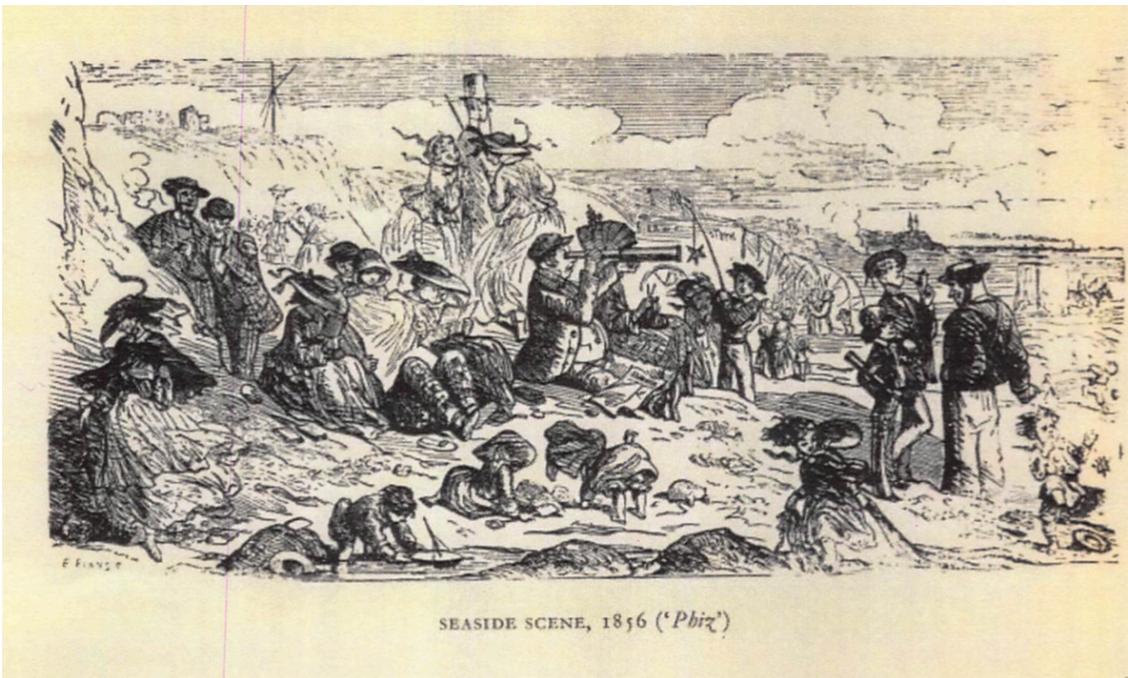
Down at Margate looking very charming you are sure to meet
Those girls, dear girls, those lovely seaside girls.
With sticks they steer and promenade the pier to give the boys a treat;
In piqué silks and lace, they tip you quite a playful wink.
It always is the case: you seldom stop to think.
You fall in love of course upon the spot,
But not with one girl — always with the lot...
Those girls, those girls, those lovely seaside girls,
All dimples, smiles, and curls — your head it simply whirls!
They look all right, complexions pink and white;
They've diamond rings and dainty feet,
Golden hair from Regent Street,
Lace and grace and lots of face — those pretty little seaside girls.

- Because they want it themselves. Their natural craving. Shoals of them every evening poured out of offices. Reserve better. Don't want it they throw it at you. Catch em alive, 0. Pity they can't see themselves. (U13. 790-93)
- 女たちだってやりたいわけだからな。生れつきの欲求なんだ。毎日、夕方になるとオフィスからどっと束になって出て来る。知らん顔してるほうがいいんだ。いらないよと言うと向うから押しかけて来る。生けりだよ、おお。自分でそれがわかっていないのはかわいそうだな (U-Δ 13.453)

- ・男性のもとで集合的に捉えられる女性 (But not with one girl — always with the lot...)
- ・「…このような考察においては女性はほとんど複数の代名詞 (they) にとって一般化され、その場合男性はわれわれ (Us) ということになる。たとえばこの章の後半部に入ってもまもなく、さっそくブルームがさまざまな女性の生体について考察する部分があるが、おこには約30行の中に女性を示す「彼ら」という主郭の代名詞が続けて10回以上出てくる」
(川口喬一『ユリシーズ演義』研究社, 1994年、pp.293-34)

ヴィクトリア朝におけるリゾート地の海辺の空間

- The sands of a popular seaside resort appeared one indiscriminate moving mass of cabs, cars, carts, and carriages; horses, ponies, dogs, donkies, and boy, men, women, children, and nurses and the least and the biggest—babies and bathing . . . little boys with spades; nurses with babies; mammas with sewing; young ladies with novels; young gentlemen with Byron, canes, and eye-glasses, older ones with newspapers, sticks and spectacles. (E. Stone, *Chronicles of Fashion. English Society from the time of Queen Elizabeth to the Present Day* (1845), qtd. in “By the Seaside,” *Englishman’s Holiday: A Social History*, 1976)



次回第14回読書会について

次回の第14回読書会（第14挿話：太陽神の牛）は10月24（日）にオンラインで実施します。予約開始日はtwitter（@YMINAMITANI）とStephens Workshopのホームページでお知らせします。後ほどアンケートフォームを別途送付しますので、今回のご感想・改善点について教えていただけすると幸いです。